

## 『マハーバーラタ』における裏切り

前川 輝光

### はじめに

『ラーマヤナ』と並び、ヒンドゥー教二大叙事詩と呼ばれる『マハーバーラタ』は、しばしばインドで最も愛されている物語とも言われる。それはおそらくちょうど中国人にとっての『三国志通俗演義』（以下『三国志』）のような存在である。

中国人、中でも中年以上の男性は、宴席などで興に乗ってくると、『三国志』の登場人物の中では誰が好きかというような話を始めることが多いとはしばしば耳にするとところだが、それだけ『三国志』の登場人物たちは中国人の心に根を張っているのである。インド人にとっての『マハーバーラタ』も正に同様と言ってよい。

『三国志』は日本にも馴染み深い。一読、印象づけられるのは、合従連衡のすさまじさである。昨日の敵は今日の友、今日の味方が明日も味方とは限らない。裏切りに次ぐ裏切りが物語を動かしていくと言っても過言ではない。権謀術数の書としても『三国志』は読まれてきたと言う<sup>1)</sup>。ところが言わば「インドの三国志」とも言える『マハーバーラタ』には、裏切りがほとんど見当たらない。このことにはある日、『三国志』と『マハーバーラタ』を比較していてふと気がついた。

『マハーバーラタ』は痛切な悲劇である。過酷な運命に翻弄される人間たちのあえぎで綴られた叙事詩である。パーンダヴァ五王子を陥れ、滅ぼそうとのカウラヴァ百王子の姦計に次ぐ姦計など、悪は描かれている。善の側とされるパーンダヴァ五王子も勝利のためには姦計に手を染めることもあった。しかし、そうした悪の中に、裏切りあるいは寝返りを搜すと、なかなか見つからない。悪人たちでさえ、裏切らないし、寝返らない。そのことはお

そらく『マハーバーラタ』全体の性格を考える上で重要なポイントの一つである。これは筆者にとって印象的な発見だった。そこで、本稿でこの問題について考察することにしたのである。

『マハーバーラタ』はパンドヴァ五王子とカウラヴァ百王子の対立を中心とした本筋部分以外にもおびたしい付加物（物語、宗教思想、政治思想…）を抱え込んでいる。筆者がここで問題にしているのは本筋部分である。本筋部分の主要登場人物に裏切りが目立たないのである。付加物については、必ずしもそうではない。最初にこのことを確認しておきたい。

## 1. 『マハーバーラタ』のあらすじ

『マハーバーラタ』における裏切りの問題を考える土台として、まず、『マハーバーラタ』のあらすじを振り返っておきたい。

ハースティナプラ国王シャーントヌは、ガンジス河の女神ガンガーに恋をし、求婚する。ガンガーは、自分がどんなことをしてもそれを止めたり、訳を問い質したりしなければとの条件のもと、承諾する。ガンガーはシャーントヌとの間に次々に7人の子を生むが、生み落とすや、皆殺してしまった。シャーントヌは約束に縛られて、ガンガーのなすがままだったが、8番目の子が生まれた時には、耐え切れず、殺害を食い止める。王の約束違反により、ガンガーはシャーントヌのもとを去る。この8番目の子がデーヴァヴラタ、後のビーシュマである。

ガンガーが去って数年後、シャーントヌ王は漁師の娘サティヤヴァティーに一目ぼれし求婚するが、サティヤヴァティーの父親に「私の娘の子が王位を継承できるなら」と条件をつけられ、苦悩する。成長したデーヴァヴラタは、文武両道に秀で、理想的な王位継承者と期待していたからである。父の悩みを知ったデーヴァヴラタは、自らの王位継承権を放棄し、王国の将来に禍根を残さぬため、生涯の不婚を誓う。この困難な誓いの後、彼はビーシュ

マ（恐るべき者）という名で呼ばれるようになる。かくてシャーントヌはサティヤヴァティーを妻とし、二人の間には二人の王子が生まれる。

ほどなくシャーントヌ王は死去する。ビーシュマの父と王国への献身も空しく、シャーントヌの二人の王子も、共に跡継ぎを残すことなく夭折する。サティヤヴァティーはビーシュマに誓いを放棄し、王となり、王国に跡継ぎを与えるよう懇願するが、ビーシュマはこれを受け入れず、サティヤヴァティーの結婚前の子、聖仙ヴィヤーサ（『マハーバーラタ』の作者とされている）が王子の妃たちに子を授けることになる。ドリタラーシュトラ、パーンドゥ、ヴィドゥラの三兄弟である。ヴィドゥラは王子の妃の下女とヴィヤーサの間の子であったため、王子にはなれず、兄二人の相談役となった。

長男のドリタラーシュトラは生来盲目であったため、パーンドゥが王位を継ぐ。この強力な王は狩猟の最中、誤って聖仙リシ・キンダマとその妻を殺してしまったため、王位を退き、森に行かざるを得なくなる。しかもキンダマの呪いのため、生涯女性に触れられなくなっていた。パーンドゥは未だ息子にめぐまれていなかった。しかし、第一夫人クンティーが若き日に聖仙ドゥルヴァーサから授かった呪文の力で、パーンドゥは5人の息子を授かることになる。これがパーンダヴァ五王子即ち、ユディシュティラ、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァである。

パーンドゥ退位後、盲目の兄ドリタラーシュトラが即位する。パーンドゥは第二夫人マードリーの色香に負けその身体に触れ、リシ・キンダマの呪いにより死亡する。クンティーに育てられた五王子はやがてハースティナブラでビーシュマ、ドリタラーシュトラに庇護されることになるが、ドリタラーシュトラの百人の王子達はこれを好まなかった。五王子と百王子の対立はユディシュティラと百王子の長男ドゥルヨーダナの間でのハースティナブラの王位継承権争いによって決定的となる。これを案じたビーシュマの建言で王国は分割され、ドリタラーシュトラと百王子はハースティナブラを、ユディシュティラは辺境の地インドラプラスタを支配する。

インドラプラスタは繁栄を極め、ユディシュティラは帝王即位式を挙行す

る。絶世の美女ドラウパディーも五王子共通の妻となっていた。ドゥルヨーダナは嫉妬に苛まれる。そこで母方のおじシャクニの入れ知恵で五王子をサイコロ勝負に誘い、シャクニの手で五王子から王国、五王子自身、妻ドラウパディーに至るまで全てを巻上げてしまう。ドラウパディーのドリタラーシュトラへの必死の訴えにより、一旦は勝負はなかったことにされ、五王子は王国と自分達及びドラウパディーの自由を取り戻すが、その後ユディシュティラが再度サイコロ勝負を強いられ、またも敗北する。その際の条件に従い、五王子は13年間追放生活を送ることになる。12年を森で過ごし、13年目は百王子方に居場所を知られずに過ごさなければならなかった。もしこの1年間に見つかってしまえば、再び12年間、森で暮らさなければならなかった。

五王子は追放の13年を何とか乗り切り、百王子側に王国（インドラプラスタ）の返還を要求するが、ドゥルヨーダナはこれを拒否。両陣営の対決は避けられないものとなって行く。かくてハースティナプラ近郊クルクシェートラの地に、両陣営の大群が集結する。

いよいよ大戦が始まろうという時、五王子最高の戦士アルジュナは、突如戦意を喪失する。敵方に恩ある人々の姿を見かけたからである。パーンダヴァ五王子・カウラヴァ百王子共通の大伯父ビーシュマ、同じく両者共通の武術の師ドローナなどである。二人とも心はむしろ五王子側にありながら、誓いや禄に縛られて百王子方に立って戦わなければならなくなっていた。アルジュナの御者をつとめていた五王子の従兄弟クリシュナ（実はヴィシュヌ神の第8の化身）は、アルジュナに戦士の義務などを説き、戦意を回復させる。

いよいよ大戦は始まり、死闘が続く。百王子方最初の総司令官ビーシュマは、戦闘10日目にアルジュナに身体中に矢を突き立てられて倒れる。ビーシュマの後を継いだドローナも五王子方の姦計により15日目に倒される。百王子方第3の総司令官カルナは、17日目にアルジュナの矢に倒れる。

カルナは実はクンティーのパーンドウとの結婚前の子で、アルジュナの

実の兄だった。運命のいたずらでカルナと五王子は敵味方に分かれて戦っていたのである。アルジュナはそれを知らなかったが、カルナは大戦直前にクリシュナとクンティーからこの恐るべき秘密を聞いていた。カルナの心は乱れた。しかし、不遇の時代に自分に目をかけてくれたドゥルヨーダナへの忠誠心から、結局百王子方に立ってクルクシェートラに赴き、アルジュナに敗れ、士道に殉じたのである。五王子方でもアルジュナの最愛の息子アビマニユ、ビーマの息子ガトートカチャなど有力な武将達が倒された。

18日目、百王子方最後の総司令官シャリヤがユディシュティラに倒され、百王子方の総帥ドゥルヨーダナもビーマとの棍棒戦に倒れる。かくて大戦はパーンダヴァ五王子側の勝利に終わった。

しかし、実は戦いはまだ終わっていなかった。父親を姦計で殺され復讐に燃えるドローナの息子アシュヴァッターマンが、数人の味方と共に五王子方の陣営に夜襲をかけたのである。五王子方は外出していたクリシュナ、五王子など以外はほとんど全滅してしまう。五王子の息子達も全員殺された。カルナの死後、母クンティーからカルナが実の兄であったことも知らされ、五王子は自分達の勝利の味の苦さに打ちのめされた。

何とか悲しみから立ち直ったユディシュティラは、弟たちと共に再び統合されたハースティナブラを統治する。敵方であったにもかかわらず、百王子たちが全滅した後、五王子にかしずかれ、静かに暮らしていたドリタラーシュトラとその妻ガンダーリーも、やがて生への倦怠をおぼえ、世を捨てて森に行く。五王子の母クンティーも2人に従った。3人はしばらく修行の生活を送った後、山火事に巻き込まれ、この世を去る。

ユディシュティラの36年の統治が過ぎた頃、クリシュナの一族ヤーダヴァ族が同士討ちによって滅びたという知らせが五王子のもとに届く。クリシュナ自身、兄バララマとともに世を去っていた。五王子はかけがえのない指導者を失い、世の無常に打ちひしがれた。ユディシュティラは王国をアルジュナの孫パリクシットに譲り、弟たち、ドラウパディーと共にヒマラヤへ向かう。妻と弟たちは次々に倒れるが、ユディシュティラはただ一人生き

残り、生きたまま天界に上る。そこで神々から最後の試練を課されるが、もちこたえ、弟たち、ドラウパディー、カルナ、ビーシュマ、ドローナ、クリシュナなど懐かしい人々との再会を果たす<sup>2)</sup>。

## 2. 『マハーバーラタ』における裏切りの諸相

この章では、『マハーバーラタ』中の数少ない裏切り、あるいは裏切りの性格を持つものの事例を整理していきたい。

### 1 心の裏切り? : カウラヴァの4人の総司令官

『マハーバーラタ』はパーンダヴァとカウラヴァの対立の物語だが、この叙事詩に特徴的なのは、両陣営の狭間に立つ両義的存在が非常な重きをなしているということである。次々にカウラヴァ方の総司令官をつとめたビーシュマ、ドローナ、カルナ、シャリヤである。彼らは身はカウラヴァ方に属しつつ、心（の一部）はむしろパーンダヴァ方と共にあった。これのあるいは心の裏切りと呼んでもいいのかもしれない。パーンダヴァ方への思いによって、カウラヴァ方の勝利に向け、100パーセントの献身は示さなかったのだから。

ビーシュマは父シャーンタヌとサティヤヴァティーの結婚のため、生涯不婚と、ハースティナプラ王国への生涯の忠誠を誓った。そのため、悪の側であることを知りつつ、カウラヴァ方に立って戦うことになるのだが、クルクシェートラ大戦の直前、「パーンダヴァ五王子だけは殺さない」とドゥルヨーダナに宣言していた<sup>3)</sup>。

カルナは大戦直前、自らの出生の秘密を知った。敵方パーンダヴァ五王子の実の兄だったのである。母だと名乗り出たクンティーや、クリシュナの説得を振り切り、あくまでカウラヴァ方に立って戦う決意を固めるが、虚心でパーンダヴァ方と戦える状態ではなくなっていた。クンティーにアルジュナ以外の五王子は殺さないという誓いも立てた<sup>4)</sup>。

パーンダヴァの四、五男ナクラ、サハデーヴァの母の兄（または弟）シャリヤは、クルクシェートラ大戦では当然、パーンダヴァ方に立って戦うつもりでいたのだが、ドゥルヨーダナに言質を取られ、心ならずもカウラヴァ方に立って戦うことになった。しかし、パーンダヴァの長男ユディシュティラの要請を受け、カウラヴァ方きっての勇者カルナの気力を削ぐという約束に応じた。

ドローナの心もしばしばパーンダヴァ方へとさまよい出ていた。愛弟子アルジュナの活躍には心踊り、アルジュナの子アビマニユの武勇には歓声を上げた。

ただし、彼らもカウラヴァ方を完全に裏切ってパーンダヴァ方に寝返ることはなかった。あくまでも「心の裏切り」どまりだったのである。彼らについてはむしろ、自らの心に逆らい、苦しみに耐えて、カウラヴァ方を裏切らなかった人々とこそ考えるべきなのかもしれない。

この4人、なかんずくビーシュマとカルナは『マハーバーラタ』の悲劇性を代表する二人の登場人物と言っても良い。二つの陣営の間に挟まれてもだえ抜く英雄達は、本格的な裏切り、寝返りを自らに禁じたからこそ、この物語の代表的な悲劇の主人公たりえたのだと言えよう。

## 2 ユディシュティラ：正義の人の裏切り？

パーンダヴァ五王子の長男ユディシュティラは、母クンティーが呪文の力で正義の神ダルマを呼び出し、授かった子である。名義上はパンドウの子とされたが、実の父ダルマ神の性格を受け継ぎ、正義の人、有徳の人、誠実な人として尊敬を集めた。その正義の人が、『マハーバーラタ』の中でもある意味で最も裏切りらしい裏切りを演じている。

クルクシェートラの戦いの15日目、ビーシュマが倒れて後、カウラヴァ方の総司令官を勤めていたドローナの猛威にパーンダヴァ方は一計を案じる。無敵のドローナにはただ一つ、弱点があった。息子アシュヴァッターマンへの溺愛である。それをついたのである。

パーンダヴァの次男ビーマは自軍のアシュヴァッターマンという名の象を殺し、ドローナに向かって叫んだ。「俺はアシュヴァッターマンを殺したぞ」。ドローナは真偽を確かめるべく、嘘をつかない人として有名なユディシュティラに尋ねる。「ビーマが私の息子アシュヴァッターマンを殺したというのは本当なのか」と。ユディシュティラは自軍の勝利のため、心を鬼にして嘘をつく。さすがに気がとがめ、不明瞭にはあったが。

ユディシュティラの嘘により、ドローナはすっかり戦意を喪失し、遂にはパーンダヴァ軍によって死に追いやられた。絶対嘘をつかない人物として信用していたからこそ、ユディシュティラの嘘はドローナを倒す必殺の武器となったのである。

ドローナはパーンダヴァ、カウラヴァ共通の武術の師だった。中でもパーンダヴァの三男アルジュナはドローナの一番弟子、秘蔵っ子だった。そのためもあり、前節でも述べたように、カウラヴァ方に属しながら、ドローナの心はむしろパーンダヴァ方寄りだった。それでも、ドローナは長年、ハースティナプラの禄を食んでいたため、カウラヴァ方を離れなかった。従って、クルクシェートラの戦場では、パーンダヴァ方の総帥ユディシュティラとは敵味方に分かれている。

敵を倒すための嘘なのだから、ユディシュティラの行為は狭義には裏切りとは言えないのかもしれない。しかし、自らへの「嘘をつかない人」との評価を逆手に、かつての師ドローナをだまし、死に追いやったことは、ユディシュティラ本人にとっては裏切り以外の何物でもなかったろう。彼の戦車は彼の徳の高さを示すかのように、それまで地上から浮き上がって走っていたのに、この嘘の後は、地上に触れるようになったという『マハーバーラタ』の語りも、それが単に戦術としてはすまされない深刻な裏切り行為であるという評価なのであろう。

ユディシュティラは昇天後、この嘘、裏切りの報いとして、天界でしばし、地獄を垣間見る。ただし、そこでユディシュティラは、幻影によって地獄で苦しんでいると思わされていた弟達、妻ドラウパディーなどを見捨てる



ことを拒否する。

私はここから一步も動かぬ。こんな苦しみをなめている愛する者たちを見捨ててどこへ行けというのか。帰って神々に伝えてくれ。私は兄弟たちを慰めるため、ここへ留まる、と<sup>5)</sup>。

ユディシュティラは、天界での最後の試練においては、兄弟、妻などを裏切らなかったのである。とは言え、ドローナへの嘘はやはり目を引く<sup>6)</sup>。

### 3 裏切られた友情：ドローナとドルパダ

正義の人ユディシュティラの「裏切り」によって命を落としたドローナは、実は若き日の友情もかつての親友ドルパダに裏切られている。

ドローナとドルパダは、二人の父親どうしが友人だったこともあり、若き日に共に遊び、ともに聖典ヴェーダを学んだ。ドローナはバラモン、ドルパダはクシャトリヤであった。父の死後ドルパダは北パーンチャーラの王となった<sup>7)</sup>。バラモンでありながら、武術を極め、高揚した気分がかつての親友ドルパダを訪ねたドローナは、ドルパダから思いもかけない言葉を浴びせられる。

バラモンよ、あなたの精神はあまり正常でないな。突然「私はあなたの友人だ」と私に言うとは。高位の王というものは、幸運に見放され、財産のない者などと友人であることは決してない。愚か者よ。時とともに老いぼれる人々には、友情もすり切れて行く。かつては、私とあなたの間には友情があった。…世の中には、古びない友情なぞ決して見出されない。…古びた友情にしがみつくな。新しい友情を始めよ。最高のバラモンよ、あなたと私の間には友情があった。それは利益にもとづくものであった。貧者は富者の友ではない。愚者は賢者の友ではない。臆病者は勇士の友ではない。旧友なんて何になるか。同等の財産と同等の家

柄を持つ両者の間に、友情や結婚が成立する。富者と貧者の間には成立しない。無学の者は博識者の友ではない。勇士でない者は勇士の友ではない。王にあらざる者は王の友ではない。旧友が何になるか<sup>8)</sup>。

ドローナにとり、ドルパダの言動は、自分への、あるいはかつての自分達の友情への裏切りに他ならなかった。ドローナはこの裏切りに対し、復讐を誓う。ハースティナプラの武術指南の職を得、カウラヴァ百王子、パーンダヴァ五王子を育て上げる。そしてこの教え子達に師への贈り物としてドルパダの生け捕りを命じる。ドルパダはパーンダヴァによって捕えられる。

ドローナはパーンチャーラ国を手に入れるが、再び二人の友情を望むとして王国の半分をドルパダに返した。ドルパダは「私はあなたに満足した。あなたの永遠の友情を願っています」<sup>9)</sup>と答えるが、はらわたは煮えくり返っていた。聖仙の力で、ドローナを殺すための息子ドリシュタデュムナを得、パーンダヴァ五王子に娘のドラウパディーを嫁がせ、復讐の機会をうかがった。

かくしてクルクシェートラでドルパダとドローナはあいまみえ、ドルパダはドローナに倒される。ドローナもまたドリシュタデュムナに首をはねられる。若き日の友情への裏切りは、戦場で2人のもと親友たちの命を奪ったのである。

筆者は『マハーバーラタの世界』で、ビーシュマ、カルナに比し、『マハーバーラタ』全体にわたって、ドローナの存在感が今ひとつ大きくないとし、その理由は「誓いにまつわる運命の錯綜があまりないからであろうか」<sup>10)</sup>とした。しかし、裏切り(らしきもの)に視点を合わせて『マハーバーラタ』を読み直してみる時、そこではごくまれな裏切りの事例にドローナが数多く関わっている事実が目が止まる。ここまでの3節で論じてきた全ての「裏切り」に関わっているのである。

#### 4 離反する異母兄弟：ユユツ

ドゥルヨーダナを長男とするカウラヴァ百王子には、1人の異母兄弟がいた。百王子の母ガンダーリーが大きなおなかを抱えていた時、やがて百王子の父となるドリタラーシュトラは、あるヴァイシヤの女性に身の回りの世話をさせていた。2人の間にはやがて1人の男児ユユツが生れる。百王子たちは両親ともクシャトリヤであったが、ユユツは母がクシャトリヤより低い身分のヴァイシヤであった<sup>11)</sup>。

ユユツのカーストをめぐるのは、カルナのような突っ込んだエピソードはないが<sup>12)</sup>、百人の異母兄弟たちおよび異母姉妹ドゥフシャラーとの間には、心理的な一線が引かれていたであろうことは想像にかたくない。このことも底流にあってか、ユユツは、クルクシェートラの大戦が正に始まろうとする時、カウラヴァ方を捨て、パーンドヴァの陣営に走っている。

その時、ユディシュティラは…叫んだ。

「我々を選ぶ者を、私は盟友として選ぶ。」

するとユユツは彼らを見て、心から喜び、ユディシュティラに次のように言った。

「非の打ち所のない大王よ、もしあなたが私を選ぶなら、私はあなたのために、あなたの見ている前で、戦場においてドリタラーシュトラの息子たちと戦います。」

ユディシュティラは言った。

「来なさい、来なさい。我々はみなして、あなたの愚かな兄弟たちと戦おう。ユユツよ、…ドリタラーシュトラの…[家系の]糸はあなたにかかっている。光輝に満ちた王子よ、愛している我々を愛してくれ。愚かで非常に短気なドゥルヨーダナは生きながらえないだろう。」

…そこでクル族のユユツは、(異母兄弟を：前川)捨て、太鼓の音を響かせながら、パーンドウの息子たちの軍隊に行った。それから、ユディシュティラ王は弟たちとともに、喜び勇んで、黄金に輝く鎧を再び身

につけた<sup>13)</sup>。

クルクシェートラの決戦では、カウラヴァ方が11軍団、パーンダヴァ方が7軍団、数の上でパーンダヴァ方が劣勢であった。ユユツがパーンダヴァ方にまわったことでわずかばかり、その数のバランスが均衡に向かったが、問題はそのことより、パーンダヴァ方の志気の高まりであったろう。

クルクシェートラの大戦はパーンダヴァ方の勝利に終わり、ドリタラーシュトラとガンダーリーの百人の息子達は全て戦死した。ドリタラーシュトラの息子としてはパーンダヴァ方についたユユツ一人が生き残り、パーンダヴァによるハースティナプラ統治において重用された。

異母兄弟とはいえ、カウラヴァ百王子を見限り、パーンダヴァ方についたのだから、少なくとも百王子の側から見て、ユユツの行為は裏切りに他ならなかった。しかし、この場合も、大戦開始寸前に衆人環視の中、堂々とパーンダヴァ方に移ったわけだから、本格的な裏切り、寝返りとまでは言えないところがある。

興味深いことに、『マハーバーラタ』では、ユユツの裏切りに接した百王子、特にドゥルヨーダナのそのことへの非難、嘆きが一切語られていない<sup>14)</sup>。ユユツの裏切りについては、それに至るユユツの葛藤、煩悶も、ドゥルヨーダナの反応も明示されず、淡々と結果だけが語られて終わっているのである。これをどう解釈すべきか<sup>15)</sup>。ともあれ、この裏切りの結果、ユユツは大戦を生き残る。ドリタラーシュトラの息子も1人生き残った。

『マハーバーラタ』にはユユツの他にも重要な異母兄弟が何組か存在している。何と言ってもまず、パーンダヴァ五王子の下の人ナクラ、サハデーヴァは上の3人ユディシュティラ、ビーマ、アルジュナとは母親が異なる。この母親を異にする2つのグループの間には、仲間割れは存在しなかった。しかし、母親たちの関係は波乱含みであった。次にこれを検討しよう。

## 5 パンドウの妻達の確執と裏切り：クンティーとマードリー

パンドウ王は2人の妻を持った。第一夫人のクンティーと第二夫人マードリーである。第1章で述べたように、パンドウはいまだ世継ぎを得ないまま、聖仙キンダマの呪いで生涯女性に触れられなくなっていた。クンティーが聖仙ドゥルヴァーサから授かった呪文の力で3人の息子を、それぞれダルマ、ヴァーユ、インドラという神々から授かった後、パンドウはなおも、自分名義の息子を望み、クンティーにさらに他の神を呼び出すよう求めた。クンティーは断った。その後、マードリーが密かにパンドウに言った。

王様、あなたが私に冷たくても、私は悩みません。大切にされているクンティーに対し、私がいつも第二の地位にいても、私は悩みません。…しかし、幸いなことにクンティーに私の夫の跡継ぎができた今、同じ条件の私に息子がいないということは、とても苦しいことです。でも、もしクンティーが私に息子を授けてくれたら、私にとって有り難いことですし、あなたのためにもなるでしょう。クンティーは私のライバルですから、彼女に直接話すことはためらわれます。もしあなたがご自身で彼女に勧めて下さったら有難いのですが<sup>16)</sup>。

クンティーとマードリーの間に緊張関係があったことが示されている。マードリーの依頼を受けたパンドウは何とかクンティーを説得する。クンティーはマードリーに「一度だけ、神様のことを考えなさい」と指示し、呪文の力を用いるが、クンティーが自分には一人しか息子を授けないつもりなのを知ったマードリーは一計を案じていた。双子の神アシュヴィン双神を思い浮かべたのである。マードリーは双子の息子を授かった。パンドウはさらにマードリーに子を授けるよう促すが、クンティーはもう承知しなかった。その時の彼女の返答がふるっている。

彼女に、「一度だけ」と申しました。ところが、彼女は双子をもうけました。私は騙されたのです。もう負けてしまいそう。これが女のやり方なのです。私は愚かにも、双神を呼べば果報も二つだとは知りませんでした。ですから、お願いですから、もう私を利用しないで下さい<sup>17)</sup>。

どこか、ユーモラスな印象も漂うエピソードではあるが、やはりパーンドゥの妻達の緊張関係は否定できない。そのことはパーンドゥ死後の2人のやりとりにも示されている。

その後、ある春の日、パーンドゥは、マードリーの色香に負け、自分を抑えられなくなり、聖仙の呪いも忘れ、交情を迫って絶命する。その後、2人の妻たちはパーンドゥをめぐって生々しくやりあう<sup>18)</sup>。

この2人の妻達の確執と裏切りの物語は、マードリーがパーンドゥに殉死したことで、終焉を迎えたかに見える。マードリーはクンティーにこう言い残し、自らもパーンドゥの火葬の薪に登った。

もし私が生きながらえても、あなたの子供たちに対し、分け隔てなくふるまうことはできません。…ですから、クンティー、私の二人の子を自分の子のように育てて下さい。…お願いします。子供たちのめんどうをよく見てやってください<sup>19)</sup>。

クンティーはマードリーの願いどおり、マードリーの双子ともども残された5人の息子達を分け隔てなく育てた。5人の兄弟達も仲が良かった。2人の妻達の確執と裏切りの物語は美談へと昇華されたかに見える。

## 6 蹂躪される戦争の規定

クルクシェートラの大戦の前、カウラヴァ、パーンダヴァ両軍は、戦い方のルールを定めた。以下のようなものであった。

戦闘から外れた者は、決して殺されるべきでない。戦車に対しては戦車で戦うべきこと。象の背に乗る者に対しては象で、騎兵に対しては騎兵で、歩兵に対しては歩兵で戦うべきこと。…声をかけて攻撃すべきである。安心してゐる者、動転した者を攻撃してはならぬ。他者と交戦中の者、油断した者、背を向けて逃げる者、武器を失った者、鎧を失った者は、決して殺されるべきでない。御者、動物、武器を運ぶ者、太鼓や法螺を演奏する者たちに対しては、決して攻撃してはならぬ<sup>20)</sup>。

要はフェア・プレイがルールとされたのである。ここの引用には明示されていないが、フェア・プレイということから、当然、一対一の勝負が要求された。一人に対し、何人もで攻めかかるのはご法度である。また、日没後にはその日の戦いは終わるべしともされていた。しかし、大戦が進むにつれ、こうしたルールは一つまた一つと無視され、蹂躪されて行った。

アルジュナの息子アビマニユは、カウラヴァ軍の強力な戦士達6人がかりで惨殺される。アビマニユ惨殺の復讐を誓うアルジュナは、その途上、自軍の武将サーティヤキが危ないと見るや、クリシュナの促しもあり、自分には無警戒の敵軍の猛将ブーリシュラヴァスの腕を矢で断ち切った。また、カルナとの一騎打ちに際しては、戦車の車輪が地中にめり込み、不利な態勢にあったカルナを、これもクリシュナの促しによって殺害している。

大戦がパンドヴァ方の勝利に終わった後も悲劇は続いた。カウラヴァ方の残党で、父ドローナをパンドヴァ方の姦計で殺されたアシュヴァッターマンが、復讐の鬼と化し、パンドヴァ方の陣営の寝込みを襲い、五王子、クリシュナ以外、ほぼ全滅させたのである。敵の寝込みを襲うなどということとは、最悪の違反とされていた。

これら戦争の規定の蹂躪は、もちろん、いずれも騎士道精神への甚だしい裏切りであった。しかし、これらの「裏切り」は、全て敵に対するものであったことに注意しなければならない。味方、身内への裏切りは1つもないのである。

## 7 純然たる裏切り、ただし魔族

パンドゥとマードリーの死後、クンティーは五王子を連れてハースティナプラに帰還する。五王子は成長し、百王子との対立が深まっていく。そんな中、百王子は燃えやすい建材で建てられた館で五王子を焼き殺す陰謀を立てるが、五王子とクンティーは何とか窮地を脱した。一難去ってまた一難。森で休んでいたパーンダヴァ五王子たちに、羅刹（魔族）の王ヒディンバが目をつける。彼は妹ヒディンバーに彼らを皆殺しにして運んでくるよう命じる。ヒディンバーは兄の命に従い、五王子たちの所に赴いた。皆疲れて眠っていたが、次男ビーマだけは、見張りのために起きていた。ヒディンバーはビーマに一目ぼれする。

彼は浅黒く、偉丈夫で、獅子のような肩をして、光り輝いている。巻貝のような頬をし、蓮のような眼をしている。私の夫にふさわしい人だ。私は決して残忍な兄の言葉に従えない。夫に対する愛は兄弟愛に勝るものだ。彼らを殺しても、私と兄の満足は束の間のものだ。だが彼らを殺さなければ、私は永遠に喜ぶであろう<sup>21)</sup>。

自由に姿を変えられるヒディンバーは、美女の姿となり、ビーマに話しかけた。

…ここには、ヒディンバという名の邪悪な羅刹が住んでいます。それは私の兄ですが、その悪い羅刹が私をここに遣わしたのです。彼は神々のようなあなた方の肉を食べたがっています。私はここで神の子のようなあなたを見て、もう他の男を夫にしたいはありません。…私は身も心も愛に支配されています。私を愛して下さい。強力な人よ、私はあの食人鬼からあなたを救ってあげます。…私の夫になって下さい。…私とともに、あちこちで無比の楽しみを味わいましょう<sup>22)</sup>。



ヒディンバは妹の裏切りを知り、怒り狂う。「この不愉快なことをした女を殺してやる」<sup>23)</sup>。ビーマとヒディンバの死闘となるが、ビーマが勝利する。ビーマはヒディンバーも殺そうとするが、ユディシュティラに止められる。女性を殺してはいけないと言うのである。ヒディンバーの切々たる訴えとユディシュティラのとりなしで、この後ビーマは、ヒディンバーと短期間の夫婦生活を送ることになる。

ヒディンバを倒した後、ビーマがヒディンバーをも殺そうとしたのは、ヒディンバーの兄ヒディンバへの裏切りが倫理的に許せなかったからではない。「羅刹というものは恨みを忘れない」<sup>24)</sup>、つまり、ヒディンバーが兄を殺した自分を恨んでいると思い込んでいたからだった。ここでは『マハーバーラタ』には珍しい、純然たる身内への裏切りが行われている。「はじめに」でも述べたように、『マハーバーラタ』では、一般に悪人達でさえ、身内を裏切らないし、寝返らないのにである。しかもここで裏切りの当事者ヒディンバーは、その裏切りによって指弾されてはいない。それは一つには、人間ならぬ羅刹の裏切りであり、しかもパーンダヴァ方に与する形でのそれであったためだったろうか。

ともあれ、ビーマはヒディンバーとの間にガトートカチャという息子まで得ることになる。この言わば「裏切りの子」ガトートカチャは、クルクシェートラの大戦でパーンダヴァ方に立ち、常に自軍に忠実に戦って戦死する。

### 3. 仲間割れは裏切りに至らない

『マハーバーラタ』では仲間割れはある程度描かれている。しかし、それらは裏切りにまでは至らない。ここで『マハーバーラタ』中の主な仲間割れの場面を検討しておこう。物語の流れにそって見て行く。

## 1 サイコロ勝負

まず、『マハーバーラタ』序盤のクライマックスである、ドゥルヨーダナとその母方の叔父シャクニが、パーンダヴァ五王子から王国、五王子自身、ドラウパディーを巻き上げたサイコロ勝負の場面。負けが込んでいたユディシュティラは我を忘れて、遂に五王子共通の妻ドラウパディーまで賭けて巻き上げられてしまう。カウラヴァ方は、ドラウパディーをさんざんにいたぶる。これを見たパーンダヴァの次男ビーマは、ユディシュティラを激しくなじる。

ドラウパディーを賭けるのはやりすぎだと思う。彼女はそんなことにふさわしくない。この乙女は…あなたのせいで、卑しくて冷酷で詐術を好むカウラヴァの連中に悩まされている。王よ、彼女のためにあなたに怒りをぶつける。私はあなたの両腕を燃やすぞ。サハデーヴァよ、火を持って来い<sup>25)</sup>。

アルジュナが何とかなだめたものの、ビーマは憤懣やるかたなかった。しかし、この一件が後々までビーマとユディシュティラの关系到深刻な影を落とすことはなかった。ドラウパディーも、ユディシュティラと袂を分かつことはなかった。

同じ場面、この後、百王子の一人ヴィカルナも、見かねてドラウパディーを賭けた賭けの不当性を訴えた。カルナが激しくやり返す。年少のヴィカルナの声は無視され、ドラウパディーはさらなる狼藉を受ける。カウラヴァの次男ドゥッシャーサナによって、衣服を剥ぎ取られそうになったのである。剥ぎ取っても剥ぎ取っても新たに衣服が生じるという奇跡によって、ドラウパディーはこの難を逃れたが、カウラヴァの品位は地に落ちた。しかし、ヴィカルナもカウラヴァ方から離反することなく、クルクシェートラの戦いにも参戦した。そこでビーマの手にかかり、命を落とすのである。

このサイコロ勝負の場面は、カウラヴァ、パーンダヴァ両陣営とも激しく

揺れ動いた稀なケースである。

## 2 クリシュナとバララーマ

五王子は13年間の追放生活を終え、インドラプラスタの返還を要求するが、ドゥルヨーダナはこれを拒否した。カウラヴァとパーンダヴァの対決は避けられなくなる。両陣営は同盟国を求め奔走する。クリシュナはパーンダヴァ方につくことにしたが、その兄バララーマは中立を選んだ。

彼は棍棒戦の達人であり、敵味方となったビーマとドゥルヨーダナは、ともに彼の最優秀の弟子だった。彼は、クリシュナがついたパーンダヴァ方の勝利を確信していた。「クリシュナなしでは世界を見ることができないから、私はクリシュナの意向に従う」<sup>26)</sup>と語り、クリシュナと対立するわけではないことを強調したが、それでも大戦に際し、中立を選んだのは、ドゥルヨーダナとカウラヴァ方の滅亡に手を貸すに忍びなかったからである。ここにはまぎれもなく、大戦に際してのヤーダヴァ族の英雄兄弟間の不協和音があった。しかしこれも、後々尾を引くことはなかった。

## 3 ドローナ殺しの波紋

既に第2章第2節で見たように、パーンダヴァ方は、卑劣な手段を用い、ドローナの戦意を喪失させた。ドローナはそれでもしばし、勇猛な戦いを続けるが、遂に気力が萎えはて、武器を捨て戦車の座席に座り込み、ヨーガに専心した。その隙をつき、ドローナを倒すために生れたドルパダの息子ドリシュタデウムナが、ドローナの首をはねた。ドローナの一番弟子であったアルジュナはユディシュティラとドリシュタデウムナに対し、吐き捨てるように言った。

私が師匠を慕って大声で叫んだのに、弟子は自己の法を捨てて師を殺した<sup>27)</sup>。…彼は愛情にかけて我々の父のようであった。…老いた師匠はいつも有益なことをしてくれたのに、愚かな我々は王権を求めて、卑

劣にも彼をあやめた。…私が、王権を望んで、彼が殺されるのにそれを見過ぎた。王よ、それ故私はうつ向いて、[すでに]地獄に堕ちている。老いたバラモンである師匠、武器を捨てた聖者を、王権のために殺したからには、今や生きているより死んだ方がましだ<sup>28)</sup>。

クリシュナが五王子にドローナをだます策を授けた時、アルジュナはそうしたやり方を嫌ったが、はっきりと反対はしなかった。自軍は自分以外、皆この策に賛成だったからである。しかし、現実にはドローナが殺されてみると、やりきれなさに打ちのめされたのだった。ドリシュタデュムナが反論する。

あなたは…師の殺害者と私を非難するが、私はそのためにパーンチャーラ国王の息子として火中から生まれたのである。…私は残酷な彼を攻撃して、戦車の上で倒したのだ。アルジュナよ、その讃えられるべき私を、どうしてあなたは讃えないのか。…敵である彼が、戦場で、私により合法的に殺されたのである。…弟子を憎む悪者が殺されたのだ。戦いなさい。勝利はあなたのものだ<sup>29)</sup>。

しかし、パーンダヴァ方の別の武将サーティヤキもドリシュタデュムナを激しく非難する。逆にビーマがアルジュナに食ってかかる。しかし、この場も結局、何とか収まった。ドローナ殺害をめぐるパーンダヴァ軍の内紛も、その後特にパーンダヴァ軍の志気を低下させることはなかったし、武將同士の関係に禍根を残すこともなかった。この後、アルジュナはクリシュナの指示で、窮地に落ちていたドリシュタデュムナを救出している<sup>30)</sup>。

#### 4 ユディシュティラとアルジュナ

ただし、この後、ユディシュティラとアルジュナはもう一度緊張関係に立つことになる。ドローナ亡き後、カウラヴァ軍の総司令官となり、猛威をふ

るうカルナにユディシュティラは不安を募らせていた。自身、カルナと戦って深傷を負ってもいた。そんな彼を気遣い、アルジュナとクリシュナは、様子を見に行く。2人の気力に満ちた姿を見て、ユディシュティラはアルジュナがカルナを倒したのだと勘違いした。上機嫌でカルナを殺した次第を聞かせてくれと言う。しかし、カルナはまだ生きていた。情緒不安定になっていたユディシュティラは怒りを爆発させる。

お前は…すばらしい戦車に乗り、…黄金で燦然と輝く刀を持ち、棕櫚ほどの長さのガンディーヴァ弓を持つ。そしてクリシュナを御者としているのに、アルジュナよ、どうしてカルナを恐れて引きあげて来たのか。臆病者、その弓をクリシュナに渡して、もしお前が御者になれば、戦いにおいてクリシュナが恐るべきカルナを殺すであろう。…戦場から逃げて来るとは何たること。臆病者よ<sup>31)</sup>。

いつにないユディシュティラの理不尽な物言いに、アルジュナもかっとして刀を抜いた。クリシュナが止めようとするが、アルジュナはおさまらない。

「ガンディーヴァを他の者に渡せ」などと私に勧める者の頭を切つてやる、というのが私の密かな誓いである。…それを許すことはできない。そこで…彼を殺して私は誓いを守る。そのために私は刀をとったのだ<sup>32)</sup>。

しかし、クリシュナは粘り強くアルジュナを説得し、何とか両者を和解させる<sup>33)</sup>。既にドローナ殺しの際のいざござはあったものの、この場面のアルジュナの激しさにはやはり驚かされる。大戦も17日目。心ならずも最愛の大伯父ビーシュマを手をかけ、最愛の息子アビマニユを失い、恩師ドローナが自軍の卑怯な手で命を落とすのを目撃して、アルジュナも情緒不安定に

なっていたのだろう。もしかすると、ユディシュティラのドローナへの「裏切り」の不快さがまだくすぶっていたのかもしれない。しかし、アルジュナとユディシュティラの小競り合いはこれが最後であった。

#### 4. クリシュナによる裏切りの叙事詩『マハーバーラタ』

以上見てきたように、『マハーバーラタ』の本筋部分では、裏切りはごく目立たない。少なくとも身内、味方への完全な裏切りは、羅刹女ヒディンバーのケース以外には一つもない。敵ではあっても心は通じ合っていた者への裏切りなら、ドローナに対するビーマ、ユディシュティラの嘘などがあるが、それもまれである。裏切りの下地にもなりうる仲間割れはある程度描かれているが、前章で見たように、いずれもほどなく丸く収まってしまう。『マハーバーラタ』は、裏切りを殊の外嫌う叙事詩と言えるのかもしれない。そんな中、異彩を放つのがクリシュナである。

クリシュナは、大戦直前、カルナに彼がクンティーの最初の子であり、パンドヴァ五王子の兄にあたると出生の秘密を告げる。そしてカルナの逆境の時、彼を取り立てた恩人ドゥルヨーダナを捨ててパンドヴァ方につくよう説得する。これこそ、裏切り中の裏切りに誘っているのである。「実の兄弟と戦っていいのか。お前がパンドヴァ方につけば、ユディシュティラはお前に王位を譲り、ドラウパディーもお前を夫の一人とするだろう」。しかし、クリシュナの権力と美女を掲げての説得も失敗に終わり、カルナはドゥルヨーダナへの忠誠を貫いて死んでいく<sup>34)</sup>。

『マハーバーラタ』の登場人物の中でもとりわけ人気の高いカルナ<sup>35)</sup>のその人気の秘密の一つも、正にここでクリシュナの勧める裏切りを断固拒否したことであるのかもしれない。もっとも、カルナがパンドヴァ方についた場合、ドゥルヨーダナへの裏切りとはなるが、兄弟の情は裏切らなかつたということになるのだが。

クリシュナはクルクシェートラの大戦中、戦争規定を無視し続ける。ア

ルジュナに次々に掟破りを指示した。サーティヤキの相手をしていたブーリシュラヴァスの腕を背後から射抜かせたり、戦車の車輪が地中にめり込んで動きが取れないカルナを殺させたり。また、アシュヴァッターマンが戦死したと嘘をつき、ドローナの戦意を喪失させる姦計をパーンダヴァに指示したのもクリシュナであった<sup>36)</sup>。

クリシュナは戦争規定の無視という広義の裏切りをアルジュナなどに実行させたが、それは皆、敵に対するものではあった。カルナには彼の味方ドゥルヨーダナへの裏切りを誘いかけたが、これもカルナが敵方であったからとも言える。クリシュナは自軍への裏切りはしていない。

いや、クリシュナは自らの真の目的を隠して、パーンダヴァをも自らの道具として用いたのである。裏切りを知らない、裏切りを嫌う『マハーバーラタ』は、実はクリシュナによる裏切りによって全編を貫かれた裏切りの叙事詩であるのかもしれない。

『マハーバーラタ』におけるヴィシュヌの第8の化身クリシュナの使命は全クシャトリヤの滅亡であった<sup>37)</sup>。クリシュナは、クルクシェートラにおいて、パーンダヴァたちを励まし、数々の詭計を駆使してまずカウラヴァ軍を全滅させた。次にパーンダヴァ方についたクシャトリヤたち（パーンチャーラ国、マツヤ国など）は、カウラヴァ軍との殺し合いで消耗させ、さらに生き残った者たちは復讐に燃えるアシュヴァッターマンの夜襲に任せた。夜襲当日、パーンダヴァ五王子、クリシュナ、サーティヤキだけはクリシュナの発案で軍営を離れていたのである。ヤーダヴァ族は2段階で減ぼした。まず、自らのナーラーヤナ軍をドゥルヨーダナに与え、パーンダヴァ方に殺させた。そして生き残ったヤーダヴァ族たちは同士討ちへと導いた。

クリシュナに操られてクシャトリヤたちは、パーンダヴァ五王子以外は無に帰した。パーンダヴァたちの殺害は、もともとクリシュナの計画には入っていなかった。パーンダヴァたちは数々の試練を経て浄化されたクシャトリヤとして生きることを許されたのである。とは言え、『マハーバーラタ』は苦難の果て、パーンダヴァの家系が永遠の繁栄を謳歌するといったハッ

ビー・エンドの物語ではない。

パーンダヴァは生き残るが、全クシャトリヤの滅亡というクリシュナの使命のため、自分達が、またクシャトリヤたちが耐えがたい苦しみにもだえ抜いたのだと知れば、クリシュナに対し、やはり心穏やかではなかっただろう。クリシュナに裏切られたという思いに当然支配されたであろう。ただし、物語の中ではパーンダヴァたちはクリシュナの意図も使命も知ることなく、最後まで彼を自分達の精神的指導者と仰ぎ続けたのであった。

『マハーバーラタ』の登場人物たちはほとんど裏切らない。裏切りを嫌悪する。しかし、クリシュナはそんな彼らを裏切り続けたのである。あるいは神には裏切りという言葉はそぐわないのだろうか。

筆者はクリシュナには、古くから特にクシャトリヤたちの世界観の重要な柱であった「運命」を人格化したという側面があるのではないかと指摘したことがある<sup>38)</sup>。その意味で、『マハーバーラタ』の登場人物たちは、運命によってその希望、願望を裏切られ続けたのだとも言えるかもしれない。

## おわりに

『マハーバーラタ』の対立図式は、パーンダヴァ対カウラヴァという善と悪のそれとなっている。これに対し、『三国志』の対立図式は魏蜀呉、さらにその他の諸侯などということになる。外的には『三国志』の方がはるかに複雑である。さらにそのこととも関連して『三国志』では裏切り、寝返りの連続である。物語の展開は実に波乱万丈となる。これに対し、『マハーバーラタ』では、裏切り、寝返りがストーリーを外的に複雑、波乱万丈なものにするということは基本的にない。

『三国志』でもたとえば蜀の英雄達（劉備、関羽、張飛、趙雲、孔明）の互いへの裏切りは、およそ考えられない。それでも、命を救われ心ならずも一時仕えた曹操のもとを離れ、劉備、張飛を捜していた関羽と再会した張飛は、最初、関羽の裏切りを疑っていた<sup>39)</sup>。『マハーバーラタ』では時々仲違



いはしても、たとえばパーンダヴァ五王子が、兄弟の裏切り、寝返りの可能性を考えるとこのような場面は一切ない。

しかし、『マハーバーラタ』はビーシュマ、カルナ、ドローナ、シャリヤという、両陣営の狭間で苦悩する両義的英雄達の一群を抱え込んでいて、内的にはむしろ『三国志』より複雑とも言える。裏切りはふんだんに登場しても、『三国志』にはこのような2つのものの間で揺れ動くタイプの英雄、両義性はその軸心となるような英雄は基本的に出てこない。そうしたエピソードもほとんどない。裏切りが当たり前の選択肢の一つであったからだろうか。

如果说えれば、かつて受けた恩義のため、関羽が赤壁の大敗後逃走中の曹操を苦悩の果てに見逃してやるという場面くらいだろうか。しかもこの場合も、関羽の心は蜀と曹操の間で真つ二つということは微塵もないのである<sup>40)</sup>。『三国志』にはビーシュマ、カルナのそのような複雑で巨大な運命の悲劇は出てこない。

『マハーバーラタ』はクリシュナ以外の登場人物に、基本的に明確な裏切りを、身内どうしで互いの裏切りの可能性を思い浮かべることさえも禁じた物語である。裏切りをめぐるこうした違いが、中国、インドを代表する2つの物語の性格を大きく異なったものとしている。

もちろん、筆者は「中国人は裏切る民族であり、インド人は裏切らない民族である」などとナイーヴな主張をするつもりはない。アジアの二大国で最も愛されている2つの物語の裏切りをめぐるこうした性格の違いは、今後とも考察を重ねていくに値する重要な問題であろうことを示唆したいのみである。

本来、筆者のテーマは『マハーバーラタ』であり、『三国志』について専門家として何かを語れる立場にはない。にもかかわらず、それについて若干の発言をしたのは、それとの比較を通して『マハーバーラタ』の重要な一面に気がついたという研究の経緯からであった。

## 註

- 1) 亜細亜大学国際関係学部三橋秀彦氏のご教示による。
- 2) この章は、筆者の『マハーバーラタの世界』めこん、2006年巻頭の「『マハーバーラタ』のあらすじ」を手直したものである。
- 3) ビーシュマについて詳しくは、同書第1章「誓いと運命——ビーシュマの物語」参照。
- 4) カルナについて詳しくは、同書第2章「カルナの悲劇」参照。
- 5) 山際素男編訳『マハーバーラタ』第9巻、三一書房、1998年、166頁。本稿では『マハーバーラタ』からの引用は基本的にブーナ批判版（Critical Edition）からの原典訳である上村訳から行うが、上村訳は訳者の急死により未完である。そのため上村が訳出していない部分についてのみ、山際編訳から引用する。
- 6) ユディシュティラは、『マハーバーラタ』の英雄達の中では、例外的な運命観の持ち主でもあった。『マハーバーラタの世界』第6章「『マハーバーラタ』の運命論」203 - 204頁。
- 7) 上村勝彦訳『原典訳マハーバーラタ』1、ちくま学芸文庫、2002年、418 - 419頁。
- 8) 同書、420 - 421頁。
- 9) 同書、438頁。
- 10) 『マハーバーラタの世界』、221頁。
- 11) ユユツが百王子のうちに入らないことは、以下のように明言されている。「ドリタラーシトラとガンダーリーとの間に百人の息子が生まれた。また、その百人の他に、彼と庶民の女との間に、もう一人の息子が生まれた」。『原典訳マハーバーラタ』1、387頁。
- 12) カルナとカーストをめぐる問題については、『マハーバーラタの世界』第2章「カルナの悲劇」、同第10章「シヴァージー・サーヴァント『死の征服者』」を参照。
- 13) 『原典訳マハーバーラタ』6、2002年、184 - 185頁。
- 14) 少なくともブーナ批判版においては。
- 15) ただし、インド国営放送による連続テレビドラマ『マハーバーラタ』では、ユユツの離反に対し、ドゥルヨーダナは不快そうに顔をゆがめ、「異母兄弟はしよせん異母兄弟さ」と吐き捨てている。*The Complete Mahabharata TV Film Script*, Vol. 8, tr. from The Hindi of Rahi Masoom Reza by Satish Bhatnagar & Shashi Magan, Calcutta: Writers Workshop, 1991, p. 67. なお、この連続テレビドラマについては、『マハーバーラタの世界』第8章「テレビドラマ「マハーバーラタ」」を参照。

- 16) 『原典訳マハーバーラタ』1、404 頁。
- 17) 同書、406 頁。
- 18) 同書、408 - 409 頁を参照。
- 19) 同書、409 頁。
- 20) 『原典訳マハーバーラタ』6、2002 年、20 頁。
- 21) 『原典訳マハーバーラタ』2、2002 年、21 頁。
- 22) 同書、21 - 22 頁。
- 23) 同書、23 頁。
- 24) 同書、28 頁。
- 25) 同書、408 頁。
- 26) 『原典訳マハーバーラタ』5、2002 年、456 頁。
- 27) ドリシュタデウムナもかつて、ドローナを殺すという自らの使命を隠し、ドローナから武術を学んでいたのである。
- 28) 『原典訳マハーバーラタ』7、2003 年、643 頁。
- 29) 同書、646 - 647 頁。
- 30) 『原典訳マハーバーラタ』8、2005 年、215 - 216 頁。
- 31) 同書、237 - 238 頁。
- 32) 同書、239 頁。
- 33) その詳細については、『マハーバーラタの世界』、95 頁参照。
- 34) ただし、実はクリシュナはさらに深い策略に基づいて、カルナへの説得をわざと失敗させた可能性がある。同書、152 頁。
- 35) 同書、79 - 82 頁。
- 36) 『原典訳マハーバーラタ』7、613 頁。
- 37) この点、詳しくは『マハーバーラタの世界』第5章「クリシュナの物語『マハーバーラタ』」第2節「クリシュナの使命」参照。
- 38) 同章第3節「クリシュナと運命」参照。
- 39) 小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』2、岩波文庫、1988 年、319 - 342 頁。
- 40) 『完訳三国志』4、1988 年、81 - 98 頁。